

モノづくりを大切にします



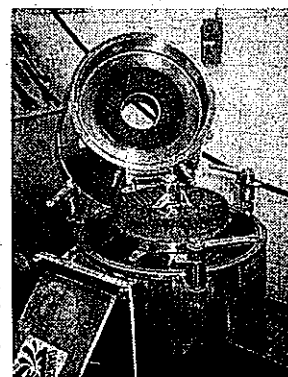
社長 増田 幸也氏

東京都心から電車で三十分。荒川を渡ってすぐのところに本社工場を持つ増幸産業は食用粉砕機のトップメーカーとして知られる。同社は創業以来、石臼式粉砕機の製造を手がけ、「国内で出回っているこの種の粉砕機では国内で7割のシェアを持つ」(増田幸也社長)という。この高いシェアには、技術力だけでなく、用途開発を繰り返し、新たな市場を見つけて出す努力に裏打ちされたものといえる。(松村信仁)

技術で市場を切り拓け

◎12◎

教授は石炭の粉砕技術の研究を手がけており、微粉末にまで粉砕できる装置を探していた。この教授から共同研究の話が持ちかけられて「父は面白いと思つて即座に回答した」(増田社長)という。



ダークで構成され、骨髄質まで粉砕される。上部はインダクター、下部は固定、下部が高速回転する。ホッパーに投入された原料は遠心力で上下グライダのすき間に入り、そこで生じる強大な圧縮や摩擦などで、原料が超微粒化される。

え、大豆をすりつぶす石臼式粉砕機を考案した。天然御影石の石臼にベルトをかけてモーターで回転させる大掛りなものであった。機械。当時、これを実

なにかほかに方法は遠心力で上下グライダのすき間に入り、そこで生じる強大な圧縮や摩擦などで、原料が超微粒化される。

「こんな素晴らしい機械がなぜ売れないのだ」と、高い評価を受ける。それから多くをとり上げ、食品業界に一気に普及した。

「この装置を売り込むのが全ク相手にしてもらえない。そこで食品業界向けの専門展示会に出品したところ、消費者団体のグループから

「こんな素晴らしい機械がなぜ売れないのだ」と、高い評価を受ける。それから多くをとり上げ、食品業界に一気に普及した。

需要探して全国行脚

つかむ情報 開発の肥やしに

増幸産業

「基本原理は五千年前(増田幸也社長)と同じ。同士の間隔を限りなくゼロに近づけて高速回転させるともいってきた。五八年、「豆腐屋の石臼式粉砕機を見せてほしい」と東京大学の教授が来社した。この

「じゃ、自分で作ってみよう」と、恒男氏が独力で高速回転しても割れない砥石の素材を世界中から取り寄せ、何度も実験を繰り返した。その結果、六五年に誕生したのが、超微粒粉砕機「スーパーマスコロイダー」の原型だ。

この装置は、上下の無気孔グライダから構成され、骨髄質まで粉砕される。上部はインダクター、下部は固定、下部が高速回転する。ホッパーに投入された原料は遠心力で上下グライダのすき間に入り、そこで生じる強大な圧縮や摩擦などで、原料が超微粒化される。

「この装置を売り込むのが全ク相手にしてもらえない。そこで食品業界向けの専門展示会に出品したところ、消費者団体のグループから「こんな素晴らしい機械がなぜ売れないのだ」と、高い評価を受ける。それから多くをとり上げ、食品業界に一気に普及した。」

「砥石も進化を遂げた」と、増田社長は多くの企業からの受託粉砕業務を引き受けながら、全国各地の素材関連の展示会に足を運ぶ。新たな破砕機の需要がどこにあるのか。市場を見据えた破砕機の研究開発が今日も続く。

月曜日に掲載

- ◆会社概要◆
- ◆本社 埼玉県川口市本町1の12の24 (048) 222-4343
- ◆事業概要 産業用粉砕機、摩砕機の製造・販売
- ◆資本金 1千万円
- ◆売上高 1億4千万円 (02年6月期)
- ◆社員数 25人
- ◆ホームページアドレス <http://www.itsuko.com>